

P 10

絵本の読みきかせにおける読み方の研究(1)

○佐々木 宏子 富田 喜代子 青悦 美代
(鳴門教育大学) (論田保育所) (鳴門教育大学大学院)

【目的】

一冊の絵本が、子どもにとって楽しめるためには、さまざまな要因が複合的に影響しあう。まずは子どもひとりひとりの生活経験、年齢、子どもの興味のありよう等の子ども側のもつ要因。二つ目は、絵本そのものの魅力。ストーリーやテーマの面白さ。めくる効果や絵のスタイル、表現方法などの視覚的な工夫等、絵本のもつ要因。そして、三つ目は、本研究のテーマである読み手の役割である。

一冊の絵を読み聞かせようとするとき、読み手はどのような準備をするだろうか。まず前述のようなさまざまな要因を考慮した上で、慎重に一冊の本を選ぶだろう。文章を読むことは、単に書かれた言葉を音声に置き換えることではない。絵と文で構成された絵本の世界を、読み手の側がまずしっかりと把握し、共感し、楽しみ、その想像的世界の美しさ、おかしさ、不思議さ、ユーモア、悲しさ等の感情的体験をする。そしてぜひ子ども達とその体験を分かち合いたい、伝えたいという強い欲求が読み聞かせへの原動力となるのではあるまいか。

そこで、本研究においては、一冊の絵本が表現力豊かに読まれ、子ども達に受けいれられ楽しめるためには、

(1) 読み手は、その絵本への深い感動と共感をもつこと。そのためには

(2) 読み手が、その一冊の絵本の文学的・絵画的構成と展開が生み出す効果や面白さに気づき、そこで得られた発見を「読む」という行為のなかに織り込んで行くこと、の要因が大切ではないかと考える。そこでこのような要因を含んだ読みとりの深さが、読み聞かせの効果や子どもの受容にどのような影響を与えるのかを本研究の目的とする。

【方法】

読み手に一冊の絵本が、A) ごく普通に与えられ、事前に練習した後、それが子ども達の前で読みきかせられる場合と、B) 同じ絵本を絵画的・文学的な側面から検討し、その絵本のテーマ、絵画スタイル、展開、芸術性、めくることの効果等を十分に討論し、把握した後、読みきかせられる場合とでは、読み手の読み方と子ども達の反応、楽しみ方にはどのような違いが生

じるのかを実験的に検討する。

読み手：3人の保育者。読み手A－保育歴1カ月(21歳)。読み手B－保育歴20年(40歳)。読み手C－保育歴24年(44歳)。(MT, A, B, Cと略)

読みきかせの対象児：公立保育所の4歳児20名をあらかじめ担任保育士とも相談の上、3つのグループに分ける。とくにグループ分けで留意した点は、日常の観察から、絵本への興味の強い子どもが均等に3グループに入るようにしたことである。

対象絵本：『おふろだいすき』(松岡享子・作 林明子・絵 福音館書店) (40P. 26×27cm)

実験手続き：第1回目の読みきかせでは、3人の読み手にあらかじめ読むように、手渡してあった絵本『おふろだいすき』を4歳児のグループの前で読みきかせてもらう。A－6名のグループ、B－7名、C－7名。読みきかせの様子は2台のビデオカメラで記録する。1台は、読み手の表情を中心に子どもの背後から記録し、2台目は子どもの表情を中心に記録する。

(A, B, Cはいずれも4歳児の担任ではない。)

第2回目の読みきかせは3人の読み手と実験者である、佐々木宏子と富田喜代子とを交えて、約2時間に渡り対象絵本『おふろだいすき』について討論したのち、第1回目と同じような手続きで、同じ読み手が同じ対象児に読みきかせを行ない、2台のカメラで同じように記録をとった。『おふろだいすき』についての討論内容の要約は次のようなものである。

絵本のもつメディアとしての大きな特徴は、「めくる」ことにより物語が展開していくことである。自立した絵本とは、あくまでも文と絵のリズムがひき起こす内的必然性にもとづいて、読み手にめくることを促すものでなければならない。

「ぼく」があひるのブッカ(プラスチックのおもちゃ)をつれて、おふろ場へ行くと、湯船から湯気が立ちのぼる。この湯気の広がりとは、「ぼく」の空想の広がりとも重なっていく。浴槽から突然あらわれるカメベンギン。まさに現実の世界のものと、空想の世界のものが同時に描かれるという「異次元同図」となっている。

「ぼく」の「そのつもり」の遊びの世界の、はじまりである。「ぼく」の手から石けんがするりと滑りお

ち、二匹のペンギンが「もうれつなスピードでせっけんのあとをおって、すべりだした」場面では、石けんの滑りで、画面は一気に今までの片面から両見開きへと広がる。そして、その石けんをばっくと飲み込むオットセイが画面の右端にあらわれる。しばらくすると、オットセイの口からシャボン玉がひとつ…、またひとつと出はじめる。シャボン玉がどんどんふくらむ画面では、時間の経過があるにもかかわらず、同じ画面で描かれるという、「異時同図」の手法が使われている。さて、「パーン」という、大きな活字とともに、大きなシャボン玉が破裂した画面をめくると、何と次のページには湯船いっぱいによく太ったカバがのっそりと顔を出していた。

次々にあらわれる動物達はある事件の連鎖であられ、クジラを除き、すべてが両生の動物である。

さらにいくつかのエピソードが重なり、お母さんがあらわれる。外からの冷たい空気が浴室に入り込み、湯気がさーと消えるとともに動物達はお湯にもぐり、それっきり出てこなくなってしまう。残されたプッカと「ぼく」は現実の世界へと回帰する。

・実験期日：第1回目－1993年10月30日～11月2日。

第2回目－1993年11月8日～11月10日。

討論をした日は、11月5日である。

【実験結果】

・実験結果の分析方法：実験中にとったビデオを再生し、次のような評定項目にもとづき、評定者にマルをつけてもらった。

① 発音は明瞭だと思うか。② 声の調子は良いと思うか③ 登場人物の性格は、読み分けられいるとおもうか④ 読み手に表現力は、あると思うか。⑤ 子どもは、その絵本を好きだと思うか。⑥ 読み手は子どもの気持ちをつかんでいると思うか。⑦ 読み手は、どのようなところに工夫していた（していない）か。

（自由記述）

①～⑥までは、非常に思う（6点）からまったく思わない（1点）の6段階評定にしたがって、集計し、平均値を出した。

評定者：鳴門教育大学大学院生（幼児教育）9名。

（4名は、小学校、幼稚園の教職経験者）

12本のビデオ（3人の読み手×2場面×2回）のうち今回は読み手の表情を中心にとったもの6本（1回目と2回目分）をランダムに評定者に見せて採点してもらった。

読みきかせ所要時間：1回目はA－10分21秒、B－12分50秒、C－12分13秒。2回目はA－12分55秒、

B－12分55秒、C－13分40秒。

結果は表1～3のとおりである。

表1 Aの項目得点 表2 Bの項目得点 表3 Cの項目得点

項目	回数	1回目	2回目		項目	回数	1回目	2回目		項目	回数	1回目	2回目	
①		5.0	5.0		①		5.0	5.3	+	①		3.2	4.0	*
②		4.3	4.9	+	②		4.7	5.2	*	②		3.1	3.7	+
③		3.3	4.6	*	③		4.6	5.3	*	③		2.9	3.7	**
④		3.6	5.0	*	④		5.0	5.7	+	④		2.7	4.0	*
⑤		4.8	4.8		⑤		5.0	5.4		⑤		4.7	5.0	
⑥		3.6	4.7	*	⑥		4.8	5.7	**	⑥		4.0	4.6	

（平均値）

* $P < 0.01$

** $P < 0.05$

+ $P < 0.10$

（t検定）

【考察】

まず、どの読み手にも、1回目と2回目では3つの項目で違いがみられた。A、B、Cの読み手に共通に進歩がみられたのは、「登場人物の性格は読み分けられているか」の項目であった。一番保育歴の浅いAはそれ以外に「表現力」と「子どもの気持ちをつかむ」という項目で進歩がみられた。Bは保育歴も長く（20年）、A、Cにくらべ、1回目からかなり高得点を得ているが、それでも項目③以外に「声の調子」と「子どもの気持ちをつかむ」で進歩がみられた。

さて、一番保育歴の長いC（24年）はAと比較すると、第1回目からあまり高い得点を得ていない。このことから絵本の読みきかせの巧みさが、単なる保育歴の長短によるものではないことが、はっきりと分かる。しかし2回目では「発音」と「表現力」では、改善をしめしていることが分かった。

以上のことから、絵本の読みきかせは、読み手が対象絵本を深く読みとり、共感することにより、より優れた読み方ができることがわかった。

さて今回は、読み手の側を映したビデオのみの分析に終わったが、次回は子どもの「楽しみ方」にポイントをおいて、分析するつもりである。